

「特集1」
ここに
生きる、
ここで
創る

F U E K I

不易

vol.45



福武教育文化振興財団フォーラム

「ここに生きる、ここで創る」

—地域は文化を求めているか—



福武教育文化振興財団では、文化芸術活動をさらに効果的に展開し、地域の発展につなげていただくために、鳥取県の中山間地で廃校を劇場として全国的に活躍している「鳥の劇場」芸術監督・中島諒人氏を招き、1月9日、ルネスホールにおいてフォーラムを開催しました。前半は、「鳥の劇場」の組織づくりや取り組みについて中島氏が基調講演。後半は、地域の舞台芸術の環境づくりに取り組んでいる大森誠一氏(NPO法人アートファーム代表)と「本づくりはまちづくり」を掲げて出版活動を続けている山川隆之氏(吉備人出版代表)が加わり、地域づくりに対するそれぞれの想いを語りました。

トークセッション「暮らしているからこそできる、まちづくり」 中島諒人×大森誠一×山川隆之

—地方と東京について

山川 今日の大きなテーマの一つ「地域」を考える時に、「中央」という大きな壁にあたる。日本の出版社は、8割東京に集中している。東京の出版社は、読者は全国ににいるという前提で作っているが、地方出版社の場合、基本的に県民くらいの読者層。その人数的な面の違いがある。

中島 東京は、全国区だから1億2000万のマーケットだが、実は東京の演劇人口はおそらく10万人から20万人程度。そうした時に、東京で10万人、20万人相手の商売をするのと、鳥取は人口最小限だけでも19万人がいる。僕の中ではマーケットの大きさは同じだし、そういう人たちとどういう関係を結んでいくかの方が面白いなと思っている。

—文化芸術活動を地域で続けていくために、地域社会に対して望む客観的な要因は？

中島 舞台芸術の理解が深まるとか、学校教育や医療の現場に演劇を取り入れてほしいとか希望はあるけれども、演劇が持つ力の可能性を信じて、出来る限りのことをやってみんなに来てもらうだけと思っている。

大森 芸術活動が続けていく過程で、舞台芸術を社会化するためにNPOを設立し、公共のことを考えるようになっていった。文化施設にしても行政が作ったからと言って、公共の場と断言はできないと思う。いかに公共的な資源として活用できるかが重要だと思う。**山川** 地元のことを記録して次世代に残していく、県外に発信していく出版という装置を持っているのに、地域の中で使いこなしてないというもどかしさを感じている。出版という行為が自分たちの持っている有用性だと知ってもらい、使いこなしてほしい。そこは地域を変えていきたい一つのポイント。

中島 東京と地方の関係がよく言われるが、僕は暮らしているここが世界の中心で、ここで生きている、ここで創るということがすごく大事だと思っている。紙で記録を残していく、ここに生きた人たちの何かが記録されていくことは、すごく意味のあること。

—住んでいるからこそできることは？

中島 評価のシステムが東京中心なので、偉い先生は誰も見てくれない。ただ、ここでよく感じるのは、いろんな人に会えること。東京にしていると日常は演劇人にしか会えない。例えば、少し前に、お医者さんに学会でクオリティ・オブ・ライフの問題を考えるようなお

まちを劇場空間にして ———— 大森誠一

Seiichi Omori

プロデューサー、NPO法人アートファーム理事長。1950年岡山市生まれ。フリーランスの編集者兼ライター。傍ら、92年以降「岡山河畔劇場」「劇ぶれす」「岡山舞台芸術ゼミナール」演劇ユニット「水蜜塔」などを創設。創造・育成・鑑賞・交流事業を通じて地域の舞台芸術環境づくりに取り組むとともに、県内外の自治体や公立ホールの自主文化事業やアーツフェスティバルをプロデュース。



芝居をしてくれないかとお願いされた。小さなコミュニティの中でいろんな人に出会いながら仕事をすることは、より本質的な仕事ができるのかなと。

大森 1993年から始めた河畔劇場は、岡山ならではの劇場空間を生み出していこうという意味では、ここでしかできないと思う。地方と東京とか都市と田舎という対立軸で自分たちの活動を決めていくというのは意味がなくて、ローカルにこだわるのがローカルを超えるという、ローカル＝インターナショナルという、そういう視点をどうやって見つけていくか、岡山の中にも普遍的な世界につながっていくような場所とか地域、それをどうやって発見して作品にしていくかを大切にしている。

山川 岡山で作ったものを全国で売れるような本にしたいと思っていたが、ことごとく失敗した。その教訓から、ここ5年ぐらい、地域の人に読んでもらえればいいというスタンスで本を作っている。そう思いながら作った美作市英田地区の棚田再生の本は、一地域の抱えている問題だが、全国共通の抱えている問題であり、北海道の人も沖縄の人が読んでもいい本。地域のことを掘り起こして、地域のことを考えた結果、それは結局、意図しなくてもグローバルなテーマになった。

—今回のサブタイトル「地域は文化を求めているか」について、どのように考えますか？

中島 地域という言葉はあいまいな意味に使われることが多いが、地域というのは「ここ」だと思う。ここには私しかいないわけで・・・私は芸術が愛好される社会になってほしいとか、私は芸術が尊敬される社会になってほしいとか。地域とは「私」の集合体であって、文化を求めているのは、私であるということ。確信を持って言える。

大森 社会のためとか、まちづくりのためとかを前提に活動しているわけではなくて、結果的にまちづくりとか社会に貢献できればいいなと思っている。創作活動でも、そういうスタンスに尽きると思う。

山川 タイトルを考えた一人として、これは自分自身への問いかけ。自分がやっていることが社会で必要とされているかを問いかけながら仕事をしている。「地域が文化を求めている」という社会を作るために日々活動することが自分の仕事であるということを感じている。文化のない、市場原理で成り立っている地域社会ではさびしいと思うし、豊かな地域というのは、文化を支えられる地域だと信じている。



Photo all by ; Koutarou Miyake

暮らしているここが世界の中心 ———— Makoto Nakashima 中島諒人

演出家、鳥の劇場芸術監督、「鳥の演劇祭4」プログラム・ディレクター。1966年生まれ。90年東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取で廃校を劇場に変え、「鳥の劇場」をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を社会に示し、演劇の深い価値が広く認識されることを目指す。芸術的価値の追究と普及活動を両輪に、地域振興や教育分野にも関わる。

文化を支えられる地域に ———— Takayuki Yamakawa 山川隆之

編集者、吉備人出版代表。1955年岡山市生まれ。三重大学農学部卒業。伊勢新聞記者、生活情報紙「リビングおかやま」編集長を経て95年に株式会社吉備人を設立。『絵本のある暮らし』『岡山人じゃが』『のれん越しに笑顔がのぞく』『愛だ!上山棚田団－限界集落なんて言わせない!』などの編集を担当し、吉備人出版としてこれまでに17年間、約400点を出版。



教育懇談会を行いました

福武教育文化振興財団では教育の現状と課題等について、幼稚園から高等学校までの教育研究団体代表者、幼、小・中学校長会、高等学校長協会、私学協会の代表者をお招きしてお話を伺う機会を設けています。
今回は、特に学力向上のための方策等について、学校の現状のお話を伺いました。



教育研究助成事業（学力・人間力、地域教育力の育成の研究活動に助成）

子どもたちの豊かな学力を保障するためには、先生方の研究意欲とともに、地域が持つ教育力を学校に活かしてもらうことが不可欠である。教育予算が厳しさを増す中、この助成金は貴重なものになっている。少額でもよいから多くの方たちに配分してもらえれば、学校の活性化につながる。また、この助成制度を知らない人もあり、一層の広報が大切だと思う。

学力・人間力育成推進事業（東京大学大学院市川伸一教授が提唱する「教えて考えさせる授業」の定着他）

「IFプラン」に取り組んだ地区の学校は、子どもたちの学力の伸びの他、家庭学習の習慣が身につく、地域と学校の連携が深まる等の効果がある。今後はこの効果が学校に定着するようにしていきたい。一方、協同学習の取り組みなど、学校では様々な方法で「授業改善研究」を進めており、このような取り組みにも助成してほしい。

国際的人材育成事業（オーストラリア・プレ体験留学）

県内の高校によく浸透してきた。参加した高校生は大きな感動を体験し、海外に目を向けるよい機会となっている。小中学校の教員も参加できれば、視野が広がり、生徒に対し早い段階から指導できる。

財団から

県教委が設置した「県学力向上検討委員会」で補充学習の拡充が提言されているが、他県では市を挙げて土曜日学習・放課後学習などに取り組んでいるところもある。
学力向上策に限らずユニークな取り組みや提案があれば財団に気軽に相談してほしい。

教育研究助成を活用して豊かな活動をしています



浅口市立六条院小学校長 横溝 勇

浅口市立六条院小学校では、教育研究助成金を受けて、「学びのユニバーサルデザインの定着」「授業の質の向上」をテーマに教職員全員が共通認識を持って取り組み、成果を上げることができました。
また、地域のことを学び大切に思う「ふるさと学習」も行っています。この日はお年寄りを招いて1・2年生が「こま回し」「福笑い」「お手玉」など昔から伝わる遊びや歌と一緒に楽しみました。

The result of an educational activity

平成23年度

教育事業の成果

学力・人間力育成推進事業の実践から得たもの

備前市立日生西小学校長 守時洋子

日生西小学校区学力向上委員会では、平成21年からこの事業に取り組み、3年目の今年一つの区切りを迎えました。
この取り組みを通して、子どもたちは成績の向上をはじめ、説明する力の定着、家庭学習の習慣化等学ぶことの基本的な習慣が確立できたと思っています。
教師には、積極的な公開授業と、「三面騷議法」を活用した授業評価により、授業力アップが図られた等の効果があげられます。
また、地元ケーブルテレビが活動の様子を繰り返し取り上げてくださったことにより、地域の関心が高まり、たくさんの方から反響が寄せられました。
今後、この成果を日生西小学校に根付かせることが大切と思っています。

*三面騷議法：東京大学大学院市川研究室でつくりだされた授業研究の方法、良い点、改善すべき点、他の分野でも活用できる点等を授業見学者が記入し一覧にまとめて評価する



矢掛町立矢掛中学校では 学力・人間力育成推進事業にICTを活用しています



国際的人材育成事業



中国訪問団の財団表敬訪問

オーストラリア・プレ体験留学のほか、岡山県の高校生と大連市第一中学(日本の高校生に当たる)の生徒が交互に訪問し、学校行事やホームステイを通じて交流する日中青年交流研修事業を行いました。
まず、岡山県の高校生20名が7月に大連第一中学を訪問し、英語の授業や学生座談会に参加しました。そして10月には第一中学の生徒12名が岡山朝日高校を訪れ、授業やクラブ活動を見学したほか、自己紹介やお互いの学校、将来の夢についての意見交換会を英語で行いました。
いずれも1週間程度の期間ですが、日中の高校生は大いに刺激を受け、理解と友情を深めたようです。

小学校の新学習指導要領が平成23年から実施され、5・6年生は外国語に親しむ活動を通じて言語や文化について理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の素地を養うこととした外国語活動が始まりました。

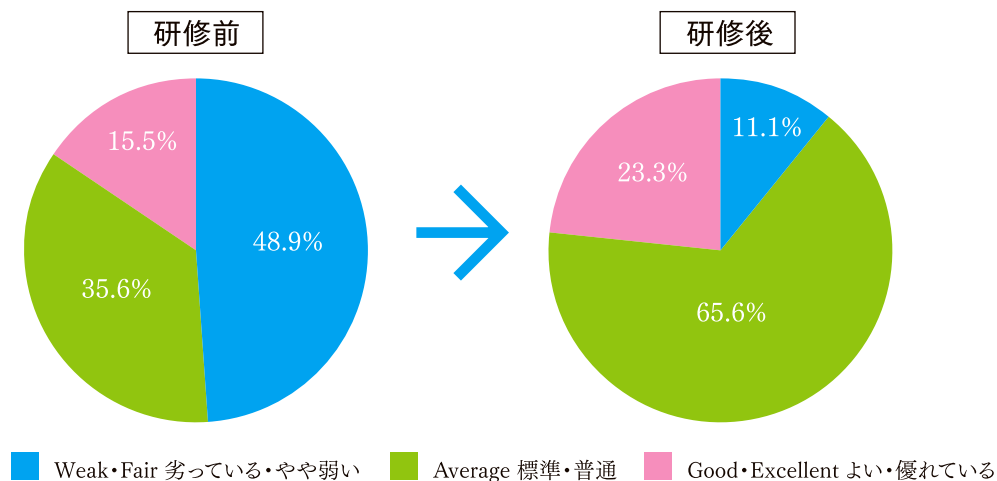
財団では、これに先駆けて平成15年から国際理解教育を推進する一環として、小学校教員を主な対象とした英語研修事業を行っており、平成23年度までに20市町、340名の先生方が受講しました。

この研修は、岡山情報ハイウェイのテレビ会議システムを活用して、岡山市にあるベルリッツ岡山ランゲージセンターと勤務地に近い学校や教育委員会などの会場を結び、外国人教師と直接会話をしながら短期間に集中して英会話を学び、英語能力の向上を目指しています。主な内容は次のとおりです。

時 期	夏季休業中に指定する2週間のうち10日間、午前又は午後の半日間に集中講義
会 場	市町村内で教育委員会に準備していただく教室や会議室
定 員	1会場当たり、1クラス5人で2クラス計10人、事前に簡単なアセスメントテストを行い、レベルに合わせたクラスを編成
講 義	ベルリッツ岡山の外国人英語講師と5人の受講生が会話を楽しみながら学びます。教室内では日本語は使えません。初級レベル1又は2から始め、おおむねレベル2又は3を目指しますが、中にはさらに上のレベルを目指すこともあります。

レベル1(初級)	conversation	自己紹介、レストランで食事を注文、道順を尋ねる、答える
	business	自分の仕事や職歴スキルを話す
レベル2(初級)	conversation	買い物をする、趣味や趣味について話をする
	business	面会の約束をする、変更をする、仕事を探す
レベル3(中級)	conversation	誘う、誘いを受ける、銀行口座を開く、アパートを探す
	business	賛成・反対の意思を伝える、面接を行う、受ける

これまでの研修成果（5段階評価の平均値）



* ベルリッツが定める評価基準の項目を研修前後で比較した

【受講者の感想】

不安な気持ちで臨んだ研修でしたが、外国人講師の方による丁寧で分かりやすい指導によって、積極的に取り組むことができました。最終日には、研修の成果を英語スピーチで発表しました。他の先生方のスピーチを聞きながら、英語力は大きく向上したと感じると同時に、自分自身への自信につながりました。今後もこの研修の成果を外国語活動の授業やALTとのコミュニケーションなど、いろいろな場面で生かしていきたいと思っています。
(加賀郡吉備中央町立津賀小学校 黒田哲史教諭)

“地産地生” 映画、真庭から世界へ

cine / maniwa 代表 山崎 樹一郎（平成22年度3ヵ年継続文化活動助成対象者）



『ひかりのおと』撮影風景

岡山県真庭市に父の実家があった。そこで農業をしようと決め、大阪を離れた。およそ2年、農業だけをした。そんな時、無性に映画を見たくなった。映画館で以前のように。しかし真庭に映画館はなく、自分で上映会をやろうと思い、勝山という地域が文化の香りが漂っていたので、勝山の加納一穂さんに声をかけた。彼女は染織家で、映画にも興味を示し、上映会開催に快く協力してくれた。そしてシネマニワという会をふたりでつくった。

農業において、地産地消という言葉は古くから知っていた。農産物だけではなく芸術や文化もそうあればと思い始めた。昔の田植え歌のような、生活や労働から滲み出るその地域の風土や気候にあったそれが映画で出来ればと思った。暮らしながら、生活しながらつくる映画。東京産や外国産のものだけがあたかもホンモノのように思われているが、地域に芸術、文化を根付かせるには地域からそれらが生まれることが大切で、それが、いまこの土地で生きながら、創りつづけようとしている大きな一因です。

そのように『ひかりのおと』という映画を作った。真庭に暮らして6年経った。僕はこの映画をも

って岡山県内を巡回上映という形で、山あいの公民館、ホール、ライブハウス、カフェ、古民家、田んぼなど、さまざまな場所をシアターにして、お客さんに見ていただいている。地域で作った映画を地域で見る。ただそれだけ。

幸いなことに『ひかりのおと』は、東京国際映画祭、ロッテルダム国際映画祭に正式出品することになった。両映画祭とも参加させていただき、世界の映画を浴び、今後さらなる研鑽と、地域のつながりを強くして映画製作をつづけようと思った。また、農業を続けながら、という自分自身の命題と、両立して、ここに生きるという覚悟は変わらず、果敢に挑んでゆければ本望で、しかしあまり肩肘張らず、ゆっくりと、ゆっくりと生きてゆければ、それが一番だと思う。

★団体のプロフィール

所在地：真庭市都喜足

設立：2007年 メンバー：80名(会員含む)

お問い合わせ先：cinemaniwa@gmail.com

シネマニワ：http://cinemaniwa.web.fc2.com

「ひかりのおと」公式サイト：http://hikarinooto.jp/

闇の中に浮かび上がる赤い鳥居。

この写真を撮った数年前、私は東京での夢破れ帰郷して間もない頃でした。憧れの地を引き上げた日の情景は今でも忘れられません。きらびやかなネオンが眩しい新宿西口を出発し、徐々に灯りが少なくなりついには真っ暗闇になる様子を深夜バスの中から見ていました。その時私は故郷を恥ずかしいと思いました。

敗北感に包まれたまま、私は半ば自虐的にその暗闇にカメラを向けました。しかし実際にファインダーを覗いてみるとその中に浮かび上がる景色の美しさに驚きました。被写体を取り巻くあの闇が一種の舞台装置として作用したのです。そこから私は少し視点を変えるだけで世界は全く違う表情を見せてくれることを学びました。

誰もが少し視点を変えるだけで新しい発見に巡り合う事ができます。それは最も簡単な世界を変える方法です。もしあなたの現状が袋小路に陥っているのならそれを試してみる価値はあるでしょう。

個人的な私のお勧めはもちろん闇の中にカメラを向けることです。特に場所は津山をお勧めします。自慢は出来ませんがここなら被写体に困る心配はなさそうです。

あれから何度も夜行バスに乗りましたがもう故郷の夜を恥ずかしいとは思いません。あの日から私の世界は（少しだけ）変わったのです。

すぎうらけた／写真家 1980 年岡山県生まれ。津山市在住。2008 年「GEISAI #11」銅賞、「I氏賞」大賞／2009 年「Daydream」(MaxProtetch Gallery/ニューヨーク)／2010 年福武文化奨励賞、「ink jet」(CASHI/東京)、「杉浦慶太展 - 農村の意匠 -」(奈義町現代美術館 / 岡山)

Editor's comments

学力低下や不登校問題など、重苦しい雰囲気の話ばかりが取り上げられている教育界ですが、現場で子どもたちを預かる先生方は日々頑張っています。

財団では、子どもたちの学力と生きる力を育てるため「学力・人間力育成推進事業」を応援しています。これを実施している地区の学校では、11月から1月にかけて研究成果を発表する公開授業を行います。地域の方や県内外の教育関係者の参加もあり、日頃学校がどのような授業をしているのかを知ってもらい良い機会となっています。

私も参加して、いつも感じることは、先生方が丁寧に辛抱強く指導しておられるということです。

先生方の勤務が多忙化し、子どもたちと触れ合う時間が取りにくくなった、という話を聞きます。そんな中でも公開授業の指導案を見ると「目標・めあて」「理解確認・理解深化」などは注意深く作成され、子どもたちがつまづくことがないように工夫されているように感じますし、教材、グッズが手作りされていたりして、子どもたちが理解しやすいように工夫されています。またICT機器が整備され、これも効果的に活用されているようです。

先日矢掛町で行われた発表会に参加した時のこと、ある参加者から「1月9日にルネスホールで行われたフォーラムに行きましたよ。3人のトークセッションは面白かった。地方にもすごい人たちがいるんですね。東京から参加した人もいました。感動しましたよ」と話してくれました。

財団の事業が地域文化の向上に貢献していることを実感したひと時でした。(財団・S)

季刊

不易

F U E K I vol.45 2012.3.1

編集・発行：

財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
URL <http://www.fukutake.or.jp/>
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作：
株式会社 吉備人
デザイン：
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷：
広和印刷株式会社



人づくり、地域づくりを応援します

財団法人 福武教育文化振興財団